三、70年安保と全国全共闘運動

全共闘運動は学園闘争の個別的限界を突破し、全国的に結合している。個別学園闘争が個別の枠を破って発展している事の質的課題の解明が問われている。

学園闘争とはいわば局地的な社会革命の問題であり、そのことが理論的にも明らかになる方向を東大闘争、日大闘争が進んだことこそ新しい発展せしめてきた原動力なのである。それは、市民社会の問題としては基本的な問題であり、その市民社会秩序としての国家体制であり、市民社会、国家権力の総体としての国家体制の中での問題としての帝国主義的再編の問題であった。そのために学園闘争の発展は市民社会に於ける「大学の存在様式への批判を通じて「市民社会総体への批判」を実践化することは〈政治的国家の打倒〉を通ずることなしには不可能であることがマルクス主義の原理である。

そのための大学批判を発展させるというのは運動の外延的一般ではない。個別学園闘争は大学批判の同質性を媒介として、さらに国家権力の大学政策を媒介として全国化することは可能であるし、行なわねばならないことである。そして部分的には市民社会批判という理念を通じ他の階級、階層の個別闘争と連帯することも可能であるだがこのようなイデオロギー的闘いとして発展してゆくということ自体、すでに闘いの領域が政治的領域にスリかえはじめたということであって、問題はダイナミックな政治闘争の開始を自然発生性に放置させることなく全面開花させることなのである。一つの個別の全済的、社会的闘争が、他の集団の闘いへと拡大するということは、言わば単なる影響者の範囲をでることはできないのであって、個別的、地域的、全済的あるいは社会的闘争を結合させてみたところで市民社会全体への実践的批判たり得ないのである。以上のように個別闘争は、その本質が鮮明になる事（例えばノーザーの東大闘争）で、全人民的課題に発展しても、それが全人民的闘争となるのは政治闘争においてでしかあり得ない。

個別の全済的、あるいは社会的闘争は市民社会における有機的関連からして、市民社会の全体性とその秩序に対する闘いへと自然発生的に発展する。だがこの闘いは決して「政治的国家」との本質的な対立を生み出すことはあり得ない。この闘いの中では国家権力が登場するとしても闘いは政治闘争にあるとは言えない。個別闘争がその闘いが社会秩序に対する根底的な変革を志向する方向へと発展すると〈局地的社会革命の質の獲得〉国家権力の暴力装置＝機動隊が出動し個別撃破によってその闘いをおしつぶそうと計る。我々は決して機動隊との闘いを自己目的化してはならないし、機動隊との闘いが個別改良闘争において必然であったとしてもそれは決して政治闘争であるとは言えない・これは個別闘争の限界性である。

このような個別闘争の限界性を突破する為に我々は現局面の自然発生的な闘争の性格を正しく把握する必要がある。これは次のように認識し得るであろう。

(a)国家の領域に関しては、「試会制民主々義」（ヌルジョア国家の根幹）への批判の広範な開始であり、社共にみられる独自の大衆闘争と政治勢力の登場である。

(b)現局面では政党のレベルで反社共が「反試会主義」「反帝国主義」として統一戦線が開始された段階であり、大塚の自然発生的性格は〈反権力再編〉〈反試会主義〉であって〈権力意識〉そのものではない。但し学生及においては〝一定の権力意識を自然発生性の中に内包している。これは学園闘争が権力そのものを要求するような極限的展開をしているからである。

(c)市民社会での流動が全面化しているのは階層的に限定されている。即ち、現局面における自然発生的昂揚の性格は学生を中心とする階層を軸として、政治的、社会的に枠づけられている。

(d)自然発生的昂揚が全共闘運動を主体として、部分的に青年労働者へ移行、波及している現段階を革命的前期の必然的つ典型である事を認証し、これを10、11月闘争の中で全国労働者試会運動との結合を勝ち取る中で飛躍させねばならない。

以上のような闘いの〈自然発生的昂揚は次の三つの性格〉を帯びている。それは

(1)帝国主義の反革命強化に反対する闘いが「反、反革命闘争」（ベトナム反戦闘争の基本的性格）として闘われており、

(2)帝国主義の社会的再編に反対する闘いが「反、帝国主義的社会再編闘争」（学園闘争、反合理化闘争等々）として闘われており、